



犬アトピー性皮膚炎への 療法食給与 スキンケア療法への影響の調査

登壇：伊從慶太 先生 (株) lsec. 松田貴子 先生 ぬのかわ犬猫病院

2026年2月、ロイヤルカナン ジャポン主催の犬アトピー性皮膚炎の症例への療法食給与に関する対談が行われた。本対談では、(株) lsec.の伊從慶太先生、そしてぬのかわ犬猫病院にて皮膚科および耳科を担当する松田貴子先生が登壇し、松田先生が実際に診療した柴犬の症例に関するケースレポートを軸に、犬アトピー性皮膚炎（canine atopic dermatitis：CAD）に対する治療の考え方や動物の家族の負担軽減、保湿やスキンケア、そして療法食の活用について意見を交わした。本対談の内容を誌面にてダイジェスト版として紹介する。臨床現場ですぐに実践できる効果的な方法として役立ててもらえれば幸いである。

(MVM編集部)

はじめに

伊從先生（以下、伊從）：いま松田先生の病院全体で皮膚症例の割合はどのくらいですか？ また、そのなかでCAD症例はどのくらいの割合でしょうか。

松田先生（以下、松田）：病院全体では皮膚症例は2～3割くらいだと思います。私は1日に12～13件診療をしますが、そのうち皮膚科、耳科の症例は7～8件、そのなかでCADの症例は4～5件くらいという印象です。

伊從：つまりほぼ毎日CADの症例が来院するということですね。遠方からの相談も多いですか？

松田：はい。当院は横浜にありますが東京からも来院がありますし、車で1時間近くかけて相模原のほうからいらっしゃる方もいます。

伊從：日本国内の犬の飼育等数は減少し、700万頭を割る状況ですが、皮膚の症例は減らない印象ですよ。私も不思議に思っています。それだけ皮膚病に苦しむ症例が多いということを表しているのだと思います。ちなみに松田先生が臨床業務に従事するところからオクラシチニブはありましたか？

松田：私はまもなく臨床10年目ですが、1年目からありました。発売されたばかりだったと思います。

伊從：そのあと、抗体医薬を含めいろいろな薬剤が上市され、犬の皮膚病の治療は以前と比べて選択肢も多く、管理しやすくなっていますか？

松田：そう思います。各薬剤の知識の積み重ねは必要で

すが、症例によって様々な薬剤をオーダーメイドで選択できるので、その点は治療しやすくなったと感じています。

ご家族の不安材料

松田：いっぽうで、CADの治療において、薬剤は長期使用となりやすく、ご家族が不安を感じることも多いです。CADは根治が期待できる治療はなく、薬剤を完全にゼロにはできないため、その点は正直にお伝えしています。家族の不安を払拭する形で伝える方法を常に模索しています。

伊從：薬に対する不安として、治療コスト面を気にされるご家族もいますか？

松田：いらっしゃると思います。そのような方には、たとえば1ヵ月の治療費を明示して、相談しながら処方を決めています。

伊從：症例は5～10kgの子が多いと思いますが、CADの治療費用となると、診察料を含めて年間で数十万円の金額をご家族が負担する可能性があると思います。また、CADは3歳以下の若齢で発症しやすいため、何年も通われる方もいるのではないですか？

松田：その通りです。私が臨床1年目のときからCADで通院されている方が数多くいます。ただ、年単位のお付き合いとなるので、次第に信頼関係ができていき、診療はすすめやすくなっていると感じています。

伊從：CADは痒みと皮膚炎、皮膚バリア機能異常、アレルギー感作、微生物叢の異常などが複雑に関与する疾患のため、多面的な治療が必要ではあるものの、多くのご家族が疲れてしまい長く続かないケースがあります。たとえば、薬プラスαというようなシンプルな治療提案のほうが長く続きやすいなどの印象はありますか？ ちなみに私の症例ではそのような方が多いと感じています。

松田：確かに治療に関して家庭内での管理が多くなると、途端にご家族自身が疲れてしまい途中で来院しなくなるケースは経験しています。

伊從：途中でリタイアしてしまった症例に対し、こうしておけばよかったという経験はありますか？

松田：痒み止めの薬を飲むことに非常に抵抗感をもつご家族がいて、CADの診断でしたがスキンケアなど薬剤以

外で対応したいとのことで、週1回のシャンプーや保湿入浴などを頑張って行っていました。しかし、併発する細菌の2次感染などもあり、薬を使用しないと痒みはもちろん、見た目もきれいになりませんでした。薬に対して抵抗のあるご家族に対して、ご納得いただけるような提案ができていればと今でも考えます。

定期的なスキンケア実施のハードル

伊從：CADの治療においてスキンケアは有用な治療ではあるものの、ご家族への負担も大きいと感じます。シャンプーや保湿など私も自身の犬に行いますが、煩雑さ、時間的、金銭的なコストの負担はある程度感じますよね。獣医師として家族に「やってください」と簡単にいえますが、実際は難しいことをお願いしているなという気持ちがあります。松田先生の経験として、どのようなスキンケアを提案するとご家族はドロップアウトしやすい印象ですか？

松田：とくにシャンプーなどで全身を濡らす、全身を乾かすような工程が入るとご家族の負担が増す印象です。また、そもそもスキンケア自体が苦手な子、手足を触られるのを嫌がる子に対して定期的に保湿剤を塗布することも、ハードルが高いといつも感じます。

伊從：とくにハードルが高いと感じる犬種はありますか？

松田：今回のケースレポートの症例でもある柴犬、また毛の長いポメラニアンなどへのスキンケアは、ご家族も大変だと思います。

伊從：性格がナイーブな子へのスキンケア、長毛の子の毛をかきわけながら行う処置は難しいですね。CADの治療ガイドラインでスキンケアは推奨されていて、シャンプーや保湿の有用性についてのエビデンスも多いのですが、実際本当にできる場合とできない場合とで分かれる印象はありますよね。また、高齢のご家族や子育て中のご家庭などではよりスキンケアの負担が大きいように思います。

松田：以前、一緒に伊從先生と診療させていただいたCADと脂漏症を併発したトイ・プードルは、重度のマラセチア増殖があったのでシャンプーを頑張るように伝えた症例ですが、先日ついにお母さんが五十肩になり、シャンプーができなくなり、途端にその子の皮膚のコンディションが悪化しました。なので、病院に来てもらったときにシャンプーをしましょうと提案しています。

伊從：補助療法としてのシャンプーや保湿などのスキンケアができない、または難しいご家族でも、CADの治療管理において必要最低限の薬剤の使用にとどめたい。そして、長期にわたって治療が継続可能な状態を維持するにはどうすればよいか。その1つとして私は以前から栄養療法に注目していました。今回の症例に栄養療法を実施する以

前から、松田先生はCADに対する栄養療法をどのように取り入れていましたか？

松田：CADの診断がついた際には、必須脂肪酸を多く含む療法食、またはサプリメントなどを使用していました。

伊從：それらの栄養療法および食事療法の実施については、ご家族側はスムーズに受け入れてくれると感じていますか？

松田：はい。ただ療法食は一般食よりも高額になるため、そこに抵抗感をもつ家族がいるのは事実です。しかし、こちらで栄養療法のメリットを交えておすすめすると比較的受け入れてもらえる印象はあります。

伊從：正直なところ、シャンプーや保湿剤を購入するよりも、療法食を用いるほうが、食事代+αのコストに抑えられるので、私はそのようにご家族へ説明することが多いです。1ヵ月の食事代をみて、療法食への変更により数千円アップするだけだとお伝えすると、意外にそれがポイントになって提案を受け入れてくれるご家族も少なくないと思っています。

今回のケースでは、ご家族がスキンケアを負担に感じているということで、スキンケアを休止してCADの療法食の切り替えを提案した形でしたが、ご家族はどのような様子でしたか？

松田：はじめは、やはり今まで行っていたシャンプーや保湿剤を休止することに戸惑いを感じている様子でした。1ヵ月に1回シャンプーしないと臭いや汚れが出るのではないかと、症状が悪化するのではないかと、という不安もあったようです。ただ、療法食に含まれる栄養素の話をし、食事により皮膚の状態が改善される可能性を伝えることで、スキンケアの負担の課題を解消できると判断し提案しました。「ご飯で保湿効果」という理解がご家族に生まれた点はよかったと思います。

伊從：人のほうが食べ物で美肌効果を高めるような話をよくききますよね。今回の療法食として使用したスキントピックですが、近年複数の論文が報告され、CADの症状の管理のみならず、皮膚バリア機能障害の改善が示されています。

松田：論文に出ているというのは獣医師側も使いやすく、ご家族側もおすすすめするときに大きい納得材料になると思います。

伊從：では、ここで今回の症例をみていきましょう。

今回の症例（2025年12月時点）

柴、2歳7ヵ月齢、去勢雄、体重9.8kg（図1）

1歳5ヵ月齢時（2024年10月）にCADを発症し、継続的にオクラシチニブ（0.55mg/kg、1日1回、経口投与）による薬物療法、スキンケアとしてシャンプー療法（自宅およびグルーミングサロンで月1回ずつ）およびセラミド

犬アトピー性皮膚炎への療法食給与 スキンケア療法への影響の調査

関連物質配合保湿剤（週に3回）が使用され、良好に管理されていた。2024年12月の時点でオクラシニブは頓服となり、2025年3月にはオクラシニブを休薬した。2025年6月の梅雨時期に掻痒が再燃したため、オクラシニブの投与を再開した。2025年9月時にオクラシニブ（0.55mg/kg、1日1回、経口投与）にて症状は良好に管理されていた。

皮膚療法食（スキントピック）介入前に獣医師が評価した犬アトピー性皮膚炎重症度指数（CADESI-4）は11、家族が評価した痒みスコア（PVAS）は4であった。皮膚療法食は推奨給与量に則って給与し、給与中はシャンプーおよび保湿剤の使用を中止した。その結果、給与1ヵ月後および2ヵ月後のCADESI-4はそれぞれ5、1に低下した。ま

た給与1ヵ月後、2ヵ月後のPVASはいずれも2であった（図2）。CADESI-4、PVASはいずれもスキントピック給与後に正常値となった。給与中に明らかな有害事象は確認

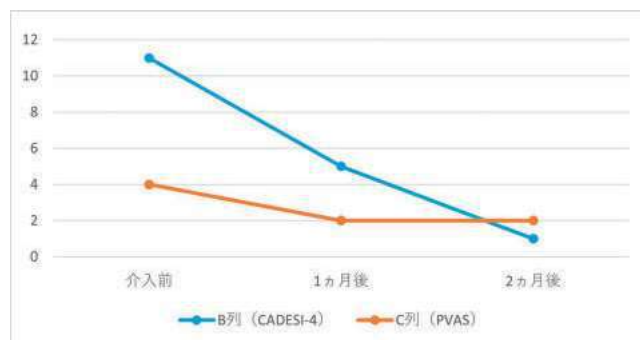


図2 皮膚療法食給与前後におけるスコア推移



図1 症例の外観の経緯

されず、ご家族へのアンケート調査で療法食の嗜好性は良好であり、便性状の大きな変化も認められなかった。皮膚の変化として、シャンプーや保湿剤を使用していた時期よりも毛量と毛質が良化した（図1参照）。また、シャンプーの休止による体臭の悪化も認められなかった。介入前のアンケート調査では、愛犬がCADであることの精神的負担が「中程度」、愛犬のCADへの対応による疲労が「中程度」、治療への出費が「たくさん」と評価されていた。

伊從：今回の症例はCADの症状がオクラシチニブとスキンケアによりある程度コントロールできている状態から療法食に変更したというケースでしたね。

松田：はい。本症例は食事へのこだわりが強くなかったので、療法食の治療が可能と判断し提案しました。

伊從：PVASの正常値が2未満ですので、療法食への変更後に痒みが4から2に減少したことはとてもよいですね。CADの長期治療管理においてはリアクティブ&プロアクティブ療法が提案されていて、リアクティブ療法では主に薬剤使用により症状をしっかりと管理し、症状が安定した状態でプロアクティブ療法へ移行して症状の再燃を防止するように維持をしていくことが重要です。プロアクティブ療法のフェーズで食事や栄養療法、スキンケアなどの補助療法が活躍するわけですが、重症度をしっかりと下げた状態から補助療法を使用すると、さらにより状態でかつ再発がしにくい状態になるという典型的な経過をたどっていると感じました。ちなみにオクラシチニブは減薬していましたか？

松田：オクラシチニブはSIDで継続していましたが、療法食の給与後に痒みも皮膚炎も落ち着いていたので、その後は頓服に変更しています。

伊從：減薬もできたということですね。

● 家族の満足度

伊從：家族のスキンケアに対する煩わしさへの満足度や感想などはどうでしたか？

松田：給与前に保湿を毎日することが難しく、週に3回程度になるとご家族から伺っていました。スキントピックの介入によって、保湿をまったくせずとも皮膚の状態を管理できたことがご家族にとって好印象だったようです。

今回の経験を通して、私も療法食が保湿を代替するアプローチとして有用であるならば、スキンケアが難しい子に対してもよりすすめやすいと思いました。また、給与後には毛量や毛質がよくなったと感じていますので、痒みによる薄毛で悩んでいる症例、脱毛症の症例にも使用できるのではないかと思います。

伊從：松田先生は総合診療を行っているなかで皮膚科診療にも力を入れている獣医師ですから、スキンケアの選択や使用法についての説明の手間も省けるなど、療法食を使うことで診察時間を短縮するメリットも生まれそうですね。

松田：大きいメリットだと思います。シャンプーの説明にはどうしても5～10分かかるので、それが療法食の購入方法の案内のみで済むのであれば、診察時間の短縮に大きくつながると思います。そして、それによってご家族の負担が減り、満足度も高くなるのであれば、とてもよいことだと思います。

伊從：診察自体がスムーズになりますよね。私も診療の際に療法食をすすめています。スキントピックを選択したご家族は長期に継続されているケースがとて多いので、ジェネラリストの先生方にとっては、大きなCADに対する補助療法になると思います。

● おわりに

松田：これまでCADに対する療法食を使用した食事療法はエビデンスも不足しており、自身も成功体験が少なかったため、そこまで積極的に取り組んではこなかったのですが、今回の症例を通じて、CADの治療としての有用性を体感しました。これからはCADの維持治療、とくにプロアクティブ治療のフェーズにおいて、食事療法を補助療法としてメインに組み込む自信ができました。

伊從：CADは治療に5～10年という長期管理が必要な疾患なので、いかに長く通院してもらうかが大きな課題の一つとなります。そのため、できるかぎりご家庭の負担を軽減するという要素が非常に重要だと考えています。そういったなかで、今回のスキントピックのような療法食の活用はこれからのCAD治療のベースになるのではないかと思います。